目白大学　心理学研究
第11号　2015年　1－14



原著

# 津波に遭った中学生が詠んだ“海”そして“地元地域”への想いとその変化

## ――東日本大震災2ヶ月後・8ヶ月後の『俳句・連句作り』から――

目白大学人間学部　黒沢　幸子
目白大学大学院心理学研究科　西野　明樹

**【要　約】**

2011年3月11日，宮城県牡鹿郡女川町に観測史上最大規模の津波が押し寄せた。“今の気持ち”を五七五に詠む『俳句・連句作り』は被災2ヶ月後より女川のA中学校で行われた学校プログラムで，以後半年おきに継続されている。

本研究では，KJ法を用い，被災2ヶ月後・8ヶ月後に中学生が詠んだ句のうち“海”および“地元地域”を示唆する語を含むものについて，それぞれ詠まれた時期ごとの質的体系化を行った。〈海の句〉の質的検討結果からは，中学生達が被災後に対峙するのは“津波”であり，“海”は再びともに生きることを願う愛すべき存在であること，中学生達の心中には喜怒哀楽が交錯し合うような複雑な“海”への想いがあることが示唆された。一方〈女川の句〉からは，被災2ヶ月後には“かつての女川”の取り戻しを求めていた中学生達が，やがて被災前の町を懐古しながらも今の女川を見つめ，未来へと向かい行こうとしていることが示唆された。

津波被災の標章とも言える“海”や“地元地域”について詠まれた句であっても，そこに詠み込まれている想いはその時その人によって異なり，一様ではない。様々な作品に共感したりその想いを認め合ったりしながら自らの複雑な心情をも認めていくことは，被災体験の語り直しにも通じる。詠み手と読み手の双方に被災体験の語り直しを促し得ることは，『俳句・連句作り』の特筆すべき特長と考えられる。

**キーワード：**震災後心理支援，表現活動，俳句，学校プログラム，心的外傷からの回復

### 問題と目的

#### 震災後心理支援としての表現活動

震災後急性期の心理支援において，その最優先事項は心身の安全感の確保であり，被災体験への直面化や言語化を不用意に行うことは禁忌とされている。しかしまた同時に，圧倒的な外力によって重大な心的打撃を被った人々の心理的回復・成長にとって，被災体験との向き合いは不可欠と言える。冨永（2011）によれば，こうした被災体験との向き合いは心身の安全がある程度確保された後に行われる必要があり，安全な表現活動の提供や実施の後援は，被災した人々の心理的回復を助ける重要な震災後心理支援活動となる。

特に，自らの圧倒的体験を安全に表現する術について経験知の少ない子どもに対しては，大人や援助者が安全な表現活動の場を設けることが肝要であり，平時より表現活動を行う文化を持つ“学校”がその役割を担うことが少なくない。例えば，1995年に阪神・淡路大震災を経験した芦屋市の小学校では，毎日の「帰りの会」のなかで3分間自由に作文を書く時間を設ける取り組みが現地教員によって行われた（冨永，2011）。2004年の新潟県中越地震約1ヶ月後には，“教師や生徒同士が互いの震災体験を共有し，絆を深める”ための作文活動が，現地教員

によって企画・実施されている（小林・櫻田，2012）。

2011年3月11日に発災した東日本大震災後，宮城県南三陸町では現地行政関係者の発案で被災1から5ヶ月後に「震災川柳」（高橋・田松・松本他，2012），宮城県名取市にある仮設住宅では被災4ヶ月後から名取の方言を使って詠む「震災五七五」（方言を語り残そう会，2012）等が行われた。川柳のユーモア性が巻き起こす笑いや，方言でこそ表現される深い哀悼の想い等，それぞれに興味深い特長が示唆されている。この2つの活動は表現形式に日本独自の定型句が用いられている点，現地住民が主体となって活動が展開していった点が共通している。

飯森（1990）や星野（1998）によれば，五七五，五七五・七七のような定型の韻律を持つ詩歌（すなわち，俳句および短歌）は，保護性・安全性が高く，詠み手と聴き手との深い共感体験を可能にする。従来は「俳句・連句療法」として精神科デイケア等で用いられていたが，震災後には，こうした定型句の持つ特性が安全な表現活動の実施を助けたと考えられている（黒沢・西野，2013a，2014a，b）。

## A中学校で行われた『俳句・連句作り』

ここで，東日本大震災2ヶ月後に宮城県牡鹿郡女川町の中学校（以下，A中学校）で始まった震災後学校プログラム，『俳句・連句作り』を紹介したい。

宮城県牡鹿郡女川町は古くからの天然良港（女川港）を中心に広がる海の町で，A中学校は町の中心部近くにある高台の中腹に位置する。2011年3月11日，A中学校校舎は辛くも津波の直撃を免れたが，高台の四方一帯は波にのまれた。在校生（2010年度3月当時）数名も犠牲となった。流失・損壊した住宅は7割，駅舎や線路，列車，幹線道路，主要な行政・金融・公共機関が喪失し，町の被災率は8割を超えた。生徒・教職員等は，大切な人や住まい，そして故郷をうしなうこととなった（まげねっちゃプロジェクト，2012）。

“素直な「今」の気持ち”を五七五にする『俳句・連句作り』が初めて実践されたのは，被災2ヶ月後の2011年5月であった。五七五の提出先は日本宇宙フォーラム（JSF）の助力により“宇宙[1]（国際宇宙ステーション）”とされたが，現地教育関係者が意図したのは，凄惨な被災状況を目の当たりにした中学生達に，津波被害によって孤立状態に置かれたまま内へ内へとため込んでいた様々な想いを表白する場を与えることであった（西野・黒沢，2013，2014b）。当該校国語科教員が主導する学校プログラムとして導入された『俳句・連句作り』は，2011年5月の初回実施後も継続実践されており，関東以西の学校との連句交流も展開されている（黒沢・西野，2014c；西野・黒沢，2014a）（Table 1）。

Table 1
A中学校の主な句作活動（2013年末まで）

| | | |
|---|---|---|
| 2011年 | 5月下旬 | 第1回『俳句・連句作り』 |
| | 7月上旬 | （卒業生の絵がISSへ） |
| | 11月下旬 | 第2回『俳句・連句作り』 |
| | 11月下旬 | 国外から寄せられた返詩を二の句（七七）に意訳 |
| 2012年 | 1月下旬 | 国内連句の三の句作り |
| | 3月上旬 | 卒業に向けた俳句作り |
| | 5月下旬 | 第3回『俳句・連句作り』 |
| | 7月下旬 | （ISSへの句作品打ち上げ） |
| | 12月上旬 | 第4回『俳句・連句作り』 |
| 2013年 | 5月下旬 | 第5回『俳句・連句作り』 |
| | 8月上旬 | （ISSへの句作品打ち上げ） |
| | 11月下旬 | 第6回『俳句・連句作り』 |

第1回目実施日の朝，全校生徒が図書室に集められた。臨時講師として中学生達の前に立ったJSF職員は，数ヶ月後に宇宙への打ち上げが決まっている作品として，2010年度卒業生による2枚の女川の絵を紹介した（『大好きな女川の海』（2010年夏（震災前）に作画）と『生きる』（2011年3月（震災数日後）に作画）。実際の句作りは主導教員が2日間かけ，各学級（1学年2学級の計6学級）の国語科授業内で順次行った。主導教員はすべての授業の冒頭で被災前の女川を映した写真複数枚と先述した卒業生による女川の絵2枚を黒板に貼り，A4サイズの裏紙を縦2つ切りにした短冊を配った（当時，コピー用紙は貴重であった）。そして，どんなことを詠んでもいいこと・書けなくてもいいことを前置きしてから，生徒達に呼びかけた。「みんなも言いたいことがあるよな。今の気持ちを俳句にしよう」。

その後約半年ごとに継続実践された『俳句・連句作り』は，どれも国語科授業時間内で行われ，句作りの教示は現地国語科教員が担った。詠む内容は引き続き“どんなことでもいい”とされ，プリントと口頭で明示された。中学生達は書きたいだけいくつでも五七五を作ることができ，提出された短冊すべてが“宇宙”に提出されるという構造もそのまま踏襲された。

また中学生達の句は，学級通信や校内掲示等によって学校内，避難所に掲示する学校通信やPTA総会資料等への記載によって町内に共有された。震災記録を後世に残す書籍への掲載（まげねっちゃプロジェクト，2012），町の行政復興目標への採用（女川町役場，2012），防災石碑への刻記（「いのちの石碑」を作る女川の子どもたちを支える会，2013）等，現地の復興・防災活動へも柔軟に活かされていった。

### A中学校と筆者等

筆頭筆者は，東日本大震災発災前から学校を単位とした「地球人の心ぷろじぇくと」の実施・展開について臨床心理学的見地から助言等を行っていた。A中学校での第１回『俳句・連句作り』実施については2011年6月頃にJSF職員から事後報告を受けた。以後，第二筆者とともにA中学校と協働関係を結び，現地訪問や都内への現地教員の招聘，書簡・メールでのやりとり等を通した情報・意見交換を継続的に行っている。

当初現地から筆者等に表明されたニーズは，中学生の句に励まされ心動かされた教員を含む現地の大人達が感じた“どうして中学生達はこんなにすごい俳句が詠めたのか”を心理的ケアの観点から探究することであった。筆者等は，生徒・教員を含む“学校コミュニティ”を『俳句・連句作り』の主役と考え，句からうかがわれる中学生達の心理的様相や変化，現地教員が主体となって実施する意義，取り組みが及ぼした心理的効果等を専門的見地から意味づけて現地の自助を励ますという，間接的支援者の立場をとっている。

### 『俳句・連句作り』に関する先行研究

『俳句・連句作り』を類例のない震災後学校プログラムと捉えた黒沢・西野（2013a）は，A中学校第1学年B学級生徒が被災2ヶ月後に詠んだ45句を素材とした質的体系化（KJ法を使用）を行った。その結果からは，海の美しさを詠む句（例「いつだってキラキラ輝く女川町」）と津波被害を詠む句（例「くやしいなどうして皆がこんなめに」）が並存していること，スローガン調の句（例「女川町復興にむけてがんばろう」）で“ふるさとの復興”を呼びかけて自他を鼓舞する様子がうかがわれることなどが考察されている。

続いて黒沢・西野（2014b）は，B学級生徒が被災8ヶ月後（第2回目『俳句・連句作り』）に詠んだ55句に同様の質的体系化を施し，黒沢・西野（2013a）の質的体系化結果と対比させながら以下の様な考察を述べている。(a) 被災2ヶ月後には大半の句に認められた“復興”の語が全く見られなくなった，(b) 津波に対する人の無力さ（例「町こわれ家をあさるがなにもなし」）のような悲哀表現が認められるようになった，(c) 同級生や亡き人との心理的絆（例「ありがとうみんなの笑顔宝物」「あの空の遙か彼方に愛しい人」）が詠われるようになった。

B学級生徒が詠んだ句を取り上げたこれら2つの研究は，甚大な津波被害に曝された中学生達の被災2ヶ月後・8ヶ月後の心理的様相をそれぞれ体系的に示しており，その変化に示唆が得られる点で意義深い。しかし，これら先行研究は1学級で詠まれた句を総合的に体系化したにとどまるため，中学生達が2ヶ月後および8ヶ月後にどのように被災体験を意味づけていたかを知るには適さない。被災2ヶ月後に詠まれた句を取り上げて質的検討を行っている先行研究（黒沢・西野，2013a，2014a）では，中学生達の特徴的な心理的葛藤や昂揚が“海”や“故郷の復興”を詠む句のなかに見出されている。津波の源となった海や壊滅させられた町への思いは被災後も女川の地で生きていく上で向き合わざるを得ないものであり，津波被災地で過ごす中学生の心理的変化に知見を得る上で着目すべき重要な観点と言える。

### 研究目的

そこで本研究では，A中学校1から3年生が

『俳句・連句作り』の第1回目（2011年5月，被災2ヶ月後）と第2回目（2011年11月，被災8ヶ月後）に詠んだ句から，被災2ヶ月後に特徴的な様相を示していた“海”および“地元地域”を示唆する語を含む句を取り出し，それぞれ，時点ごとに質的体系化を行う。これらによって，甚大な津波被害に曝された中学生達がその後被災地で暮らしながらどのように被災を受け止め意味づけていくのかについて，その概要に知見を得たい。

## 研究手続き

### 素材となる句の選出

2011年度にA中学校1から3年生が『俳句・連句作り』で詠んだ句の総数は666句で，被災2ヶ月後（5月）293句，被災8ヶ月後（11月）373句であった。

**〈海の句〉の選出**　句に用いられている“海”に類する語を一句ずつ調べたところ，「海」，「波」，「湾」，「浜」，「港」，「太平洋」，「魚（含魚の固有名詞）」が確認された。これらの語を1つ以上含んでいたのは，5月29句，11月28句であった。次に，基準となった語が“海”を指し示すものであるかという観点から精査を行った。固有名詞の一部（例「みなと祭りこんな状況でもやりたいな」（5月），「この冬も見れるといいな海ぼたる」（11月）），海を泳ぐ魚ではなく食べ物としての魚（例「ふるさとが女川なのにサンマ食えん」（11月））として用いられるにとどまっていた10句を除いた5月27句（全体の9.2％），11月20句（全体の6.2％）が〈海の句〉となった。

**〈女川の句〉の選出**　〈海の句〉と同様に，“地元地域”を指し示す語として，「女川」，「故郷（ふるさと）」，「町（まち）」，「地域」，「被災地」，「ここ」を認めた。これらの語を1つ以上含んでいたのは，5月80句，11月87句であった。次に，基準となった語が“女川”を指し示すものであるかという観点から精査を行い，明らかに女川以外の土地を指し示していた句（「震災であの人行った遠い町」（11月））を除く5月80句（全体の27.3％），11月86句（全体の23.1％）を〈女川の句〉とした。

### 質的検討の手続き

句の質的体系化は，KJ法グループ編成（川喜田，1967）の作業を参考にして行った。KJ法は，データを体系的かつ独創的に理解する上で有用とされている質的研究法である。単なるカテゴリ分けに留まらない創造的な知見を得ることができると言われている。正統な手続きの実施には一定の熟達が求められるため，KJ法本部・川喜田研究所認定コンサルタントから対面で個別指導を受けた経験を持つ第二筆者が主導しながら，以下のような手続きで質的検討を行った。なお，句の検討に際しては，数時間に及ぶ現地教員とのヒアリングや膨大な現地の被災・復興に関する資料・情報の収集と整理を行った。

**ラベル作り**　KJ法では，ひとつの中心性を持った“訴えかけ（志）”を最小単位として素材となる情報の切片化を行い，1切片ごとにラベルを作成する（川喜田，1967）。しかし“俳句”には，すでに詠み手に付与された訴えがあると考えられる。そこで，俳句1句を1単位と考え，句と作業追認用の通し番号を付した紙片をラベルとした。

**体系化の手順**　①素材となるラベルが一度に視野に入るよう，ラベルを机上に並べた。並べる順序はMicrosoft Excel 2010を用いて事前に作成しておいた乱数表に従った。②俳句を詠み上げながらその“志”を汲み取り，同種の訴えかけを感じるラベル同士を組にしながらラベルのグループ化を行った。③グループごとに構成するラベルに詠み込まれた“志”の近しさを確認しながら，グループ内の句の“志”を総合的に捉え得るグループ名を創出していった。④同じグループに“志”の方向性が異なるものが認められた場合や，グループ間で“志”の違いが明確でないと判断された場合には，適宜グループを再編成した上でグループ名を新たに考え直した。①から④までの手続きは第二筆者が担った。⑤第一筆者が同じグループ内の“志”の凝集性，グループ間の弁別性，全体の総合的な論理性を客観的視点から確認した。⑥二者間で見解が異なった際には，通し番号を辿ってグループ編成の作業をやり直し，互いに合意が得られたと判断できるようになるまで協議をくり返した。

## 倫理事項

筆者等はＡ中学校と協働関係を結んでおり，主導教員から，生徒の句や句作りに関する各種資料等，研究の推進に貢献し得る様々な情報の提供を受けている。研究目的および研究協力等に関する倫理的配慮は口頭および文書を用いて十分な説明を行った上で，校長との間で同意書に署名を交わしている。また，これとは別に，生徒が詠んだ句の研究利用についてJSFとの間で使用許諾契約を交わしている。

## 結果

以下，体系化によって得られたグループ名を【　】，素材となった句（一部引用を含む）を「　」で示す。

### 津波２ヶ月後に詠まれた〈海の句〉

2011年5月の〈海の句〉27句のうち，筆者等がその“志”を読み取ることが困難であった1句が分析過程で素材から除かれた。残り26句はTable 2のような7グループに体系化された。

【豹変した海の脅威】に集められたのは，町をのみ込む津波の様子を詠んだ句（計4句）であった。【黒い波に奪われた】には，「黒い波」によって壊滅させられた「町の景色」や町とともに流された「なき」人について詠まれた句（計7句）が集まった。

【津波に負けない】には，津波に曝されてもなお流されないものを思い起こして自らを励ます句（計3句）が集まった。【割り切れない海への想い】を構成した2句は，青い春の海を前に抱かれる「複雑な思い」を詠んでいた。【それでもきれいな女川の海】は，「キラキラと輝く」海の美しさや勇壮さを詠む句（計5句）によって構成されていた。

【海と共に再び】を構成したのは「海の町」の再建を願う句（計3句）であった。【海へ還る】には津波に流されたものを海のなかに見出そうとする句（計2句）が集まった。

### 津波８ヶ月後に詠まれた〈海の句〉

2011年11月の〈海の句〉20句はTable 3のような5グループに体系化された。

【津波に言いたい】は，無情にも町を襲い多くのものをのみ込んでいった津波の「非道」さやその悔しさを訴える句（計4句）によって構成された。【今、青くきれいな海】には，震災の日から半年あまりを経て今や青々と広がっている「あの日とちがう」海の眺望を詠む句（計7句）が集まった。【なぜこの海が】には，目の前の「キレイな海」が突如襲いきたことの哀しさや不条理を詠う句（計5句）が集まった。

【豊かな海よもう一度】は，海との睦まじい日々が「戻って」くることを願う句（計3句）によって構成された。他の句との凝集性が認められなかった「おじいさん海から私をみていてね」には，【海から見守られて】というグループ名が付けられた。

Table 2　被災２ヶ月後の〈海の句〉

| | |
|---|---|
| **豹変した海の脅威（15.4%）**<br>女川に豊な海が牙をむく<br>太平洋、女川の町に、牙をむく。<br>大津波全てを飲み込み家壊れ<br>思いだす津波がのみ込む女川を | **割り切れない海への想い（7.7%）**<br>うらんでもうらみきれない青い海<br>複雑な思いで見つめる春の海 |
| **黒い波に奪われた（26.9%）**<br>海の町どこへ行ったのあの風景<br>おだづなよ、地震のせいで、津波きた。<br>思い出とあとに残るは海の跡<br>黒つなみ女川町の景色を消しさった<br>黒い波のまれて消える町の色<br>黒い波心も町も持ってった<br>今はなきおばと歩いた浜の道 | **それでもきれいな女川の海（19.2%）**<br>今だってきれいな海だ女川湾<br>そよそよと風に吹かれてなびく海<br>キラキラと輝く海が好きなんです<br>晴れの日は海がキラキラ宝石箱<br>海の上船の上でははしが舞う |
| **津波に負けない（11.5%）**<br>津波にね負けない大きな桜の木<br>海水についたすずらん咲いていた<br>あの波をこえて見るのはあの花火 | **海と共に再び（11.5%）**<br>取り戻そう海の郷里女川を<br>平和な日港の町にまたいつか<br>もう一度創り直そう海の町 |
| | **海へ還る（7.7%）**<br>おじいちゃん海が恋人デートしに<br>きっといるペットのカメは海の中 |

注）当時の中学生が短冊に書いた句をそのまま転記している

Table 3　被災８ヶ月後の〈海の句〉

| | |
|---|---|
| **津波に言いたい（20.0%）**<br>黒い波おれの家をかえしてよ。<br>どうせならマンガの海から大津波<br>大津波非道な神もいたもんだ<br>けしてやる津波がつくったつめあとを | **なぜこの海が（25.0%）**<br>何故だろう海を見つめて涙あふれる<br>海を見る私の気持ち複雑で<br>海の中救えるものなら救いたい<br>なぜだろうあんなにキレイな海なのに<br>今の海町を見つめてなに思う |
| **今、青くきれいな海（35.0%）**<br>青い海とってもきれい女川町<br>海を見て黒い津波はもう青い。<br>ふとみると家の窓から青い海<br>きれいだなあの日とちがう海の色<br>海を見てそっとつぶやくきれいだな<br>海の色山とはちがって変わらずに<br>青い海夕日に染まる女川町 | **豊かな海よもう一度（15.0%）**<br>女川の海にいた魚よ戻ってこい<br>戻って来い秋刀魚の背中にのってこい<br>いつの日か泳いで見たいな御前浜<br>**海から見守られて（5.0%）**<br>おじいさん海から私をみていてね |

注）当時の中学生が短冊に書いた句をそのまま転記している

### 津波２ヶ月後に詠まれた〈女川の句〉

2011年5月の〈女川の句〉80句のうち2句が，その“志”を読み取ることが困難であったことを理由に分析過程で素材から除かれた。残り78句はTable 4のような8グループに体系化された。

【流されていく女川】には，女川が今まさに津波に襲われている様子を詠む句（計9句）が集まった。【変わり果てたふるさと】を構成したのは，我が目を疑うような「見たことない」津波襲来後の町の惨状やそこに女川を重ねながらかつての風景を追憶する句（計6句）であった。【懐かしいあの町を】には，豊かな自然に囲まれた活気ある港町としての女川を追慕する句（計8句）が集まった。【あの女川を取り戻す】は，復興に向けた想いを自他に呼びかけるスローガン調の句（計29句）によって構成された。【大好きな我らが女川】を構成したのは，津波被災によって失われてしまったからこそ意識化された故郷“女川”への想いを詠む句（計8句）であった。

【新たなる未来に向かう希望】には，未来に向かう新たな道のりに歩み出そうとする意志や希望を詠む句（計11句），【春めき始めたみんなの女川】には，ところどころに残る変わらぬ女川や，津波を経て初めての春が訪れた女川の光景を詠む句（計7句）が集まった。

### 津波８ヶ月後に詠まれた〈女川の句〉

2011年11月の〈女川の句〉86句は，Table 5のような10グループに体系化された。

【不屈の女川】を構成したのは，復興に向けた決意を詠む力強い句（計5句）であった。【なき女川への想い】は，かつて何の気なしに過ごしていた女川での日常が今は取り戻すべくもない儚いものになってしまった哀しさを詠う句（計9句）によって構成された。【まださら地の女川】には，かつての女川にはあるべきものが今はない寂しさやもどかしさを詠む句（計8句）が集まった。

【あの日からの歩みと回復】は，徐々に復興へと進みつつある町の様子を詠む句（計15句）によって構成された。【移りゆく時節】は時とともに秋から冬へと装いを変えていく周囲の自然やその先にある春への期待を詠む句（計9句），【女川に息づく自然】は活き活きとした女川の自然やそれを見て抱いた気持ちを詠う句（計6句）によって構成された。

【育ってきたふるさと】にはかけがえのないふるさとを慕う句（計5句），【ここに女川町民として】には女川に住まう者としての心情や支援への感謝を詠む句（計11句）が集まった。【未来への門出】を構成したのは，被災を超えて未来へと踏みだそうとする決意を詠い上げる句（計12句）であった。【この先の未来を女川とともに】には，今もこの先も女川とともに日々を過ごしながら未来を形作ろうと詠む句（計6句）が集まった。

### 考察

本研究では，津波に遭った女川町のＡ中学校で被災２ヶ月後・８ヶ月後に実践された『俳句・

Table 4　被災２ヶ月後の〈女川の句〉

| | |
|---|---|
| **流されていく女川（11.5%）**<br>好きだった女川町が流れてく。<br>思いだす津波がのみ込む女川を<br>女川に豊かな海が牙をむく<br>故郷を奪わないでと手を伸ばす<br>黒い波心も町も持ってった<br>黒い波のまれて消える町の色<br>黒つなみ女川町の景色を消しさった<br>太平洋、女川の町に、牙をむく。<br>この町を黒いカーテン包みゆく | 失なった町はきっと取り戻す<br>今だから笑顔が大事女川町<br>女川は絶対元に戻るはず<br>女川は美しい町負けないぞ<br>震災に負けてたまるか女川町<br>被災地の皆と協力復興へ<br>女川の人々絶対くじけない<br>乗り超えるそれが俺たち女川っ子<br>女川に必ず咲かせる笑顔の花を<br>女川に笑いがもどるまでがんばるぞ<br>がんばろう女川町復興のために<br>女川町未来のために、がんばろう<br>女川町復興にむけてがんばろう<br>女川町元気と笑顔で復興へ |
| **変わり果てたふるさと（7.7%）**<br>夜寝ると前の女川思い出す<br>海の町どこへ行ったのあの風景<br>故郷の豊な景色今どこに<br>見る景色いつもと違うふるさとが<br>見たことない女川町を受けとめる<br>震災後女川見た時おどろいた | **大好きな我らが女川（10.3%）**<br>今思う俺は女川大好きだ<br>女川のために俺は何できる<br>女川は流されたんじゃねぇんだよ<br>震災をうけてもふるさと離れない<br>あたらしい町をおれらがつくってみせる<br>女川の希望の星はぼくたちだ<br>僕達が元気にさせる女川を<br>町民を元気にするぞ中学生 |
| **懐かしいあの町を（10.3%）**<br>女川の昔の景色思いだす<br>女川のきれいな景色もう一度<br>あの町をまた歩きたいゆっくりと<br>あの街にまたもどりたいなあの場所に<br>いま思うあの女川がなつかしい<br>愛してたきれいな町並また見たい<br>いつの日か再び会えるあの町に<br>平和な日港の町にまたいつか | **新たなる未来に向かう希望（14.1%）**<br>もう一度創り直そう海の町<br>新しく女川は今生まれ変わる。<br>女川は新たなスタート切っている<br>窓ぎわでみえてくるのは未来の町<br>ガンバレとささやく町の風の声<br>風光り女川町に希望あり<br>女川の希望を抱いて前に進む<br>町も私も復興とともに育ってく<br>女川が光り輝やく復興後<br>女川を造っていこういい町に<br>風光る町の未来もまた光る |
| **あの女川を取り戻す（37.2%）**<br>戻したい笑顔集まる女川町<br>戻したい笑顔あふれる女川町<br>いつかまたみんなでにぎわうあの町へ<br>あの景色また女川で見るために<br>女川をきれいな町にもどしたい<br>取りもどせ自分のふるさと女川町<br>とりもどそう笑顔があふれる女川町<br>ぼく達が、女川町をとりもどす<br>女川は僕たちの手で取りもどそう<br>女川にきれいなけしきをとりもどせ<br>失った町の風景取りもどす<br>きれいな町みんなの笑顔で取りもどそう<br>取り戻せ自然豊かな女川を<br>取り戻そう海の故郷女川を<br>女川町いつかあの頃取り戻す | **春めき始めたみんなの女川（9.0%）**<br>女川に笑いがもどる子どもたち<br>女川に桜の花びらひらひらと<br>女川に新たな春を告げる鳥<br>女川の空気は今もかわらない<br>今だってきれいな海だ女川湾<br>いつだってキラキラ輝く女川町<br>女川は、町じゅう全体花が咲く |

注）当時の中学生が短冊に書いた句をそのまま転記している

連句作り』で中学生が詠んだ句から〈海の句〉と〈女川の句〉を選出し，それぞれ詠まれた時期ごとに質的検討を行った。女川に暮らすなかで日々目に入る“海”や“地元地域”は，津波による被害や喪失の一種の標章とも言える。本研究で得られた4つの質的体系化結果は，句の詠み手である中学生の目線により近しい視座に立つことで得られた知見と考えられる。以下，これらの結果をもとに，津波に被災した町で暮らす中学生の心理的様相について考察する。

### 襲来した津波と青く美しい大好きな海

東日本大震災によって生じた津波は，とてつもなく強大な力で町やそこに住まう人々を襲った。【豹変した海の脅威】（5月）や【黒い波に奪われた】（5月）にまとまった〈海の句〉からは，中学生達が津波襲来によって体験することとなった心的衝撃と喪失の重大さがうかがわれ

Table 5　被災８ヶ月後の〈女川の句〉

**不屈の女川（5.8%）**
災害め女川町をなめるなよ
今にみろ女川の力見せてやる
合い言葉女川魂負げねぇど
絶対に女川町民くじけない
女川は、いつか絶対復活だ!!

**なき女川への想い（10.5%）**
目を閉じて町のサイレン八回目
町こわれ家をあさるがなにもなし
大好きだ震災前の女川よ
女川を返してくれと願い事
女川の今の景色涙出る
あの町とこいだ自転車今はない
今は無き古き女川思い出す
今の海町を見つめてなに思う
記憶から本来の町うすれてく

**まださら地の女川（9.3%）**
復興はいつになるのか女川町
まださら地復興はいつ？女川町
戻って来い俺らが大好き女川町
被災地にしみじみ渡る秋の風
女川町がれき片付きまったいら
女川町何にもなくて寒そうだ
女川の海にいた魚よ戻ってこい
ふるさとが女川なのにサンマ食えん

**あの日からの歩みと回復（17.4%）**
あの日から復興し始めた女川町
女川の景色はがらりと変わったよ
女川町あのときよりもいい景色
女川はここまでかわった半年で
文化祭笑顔が広がる女川町
女川は近づいている復興に
女川町復興に一歩近づいた
少しずつ町に光が灯りだす
止まってた女川の時動きだす
文化祭地域全体輪になった
少しずつ取りもどしてる女川町
七ヶ月今女川は進化する
あの日から新しき町できあがる。
少しずつ戻ってゆくよ女川町
あの日から笑顔が増えたこの町に

**移りゆく時節（10.5%）**
時間(とき)がたてばがれきから草へ変わる町
女川に涼しい風が吹いてきた
表情も町も葉の色かわってく
秋になり色がかわった女川町
町見ると緑が少ないもう秋だ
秋の空夕ぐれ女川トンボ飛ぶ
クリスマス町の明かりがまた灯る
来年の春には女川何色に？
来年はキレイな女川見てみたい

**女川に息づく自然（7.0%）**
青い海とってもきれい女川町
いつだって町は消えても空青い
太陽は明るく町照らす
町をみる自然と笑顔あふれ出す
青い海夕日に染まる女川町
いつみても女川町は生きている

**育ってきたふるさと（5.8%）**
いつかまたこの女川でまた会おう
女川でみんなの笑顔永遠に
女川を忘れないように写真撮る
またいつか遊び歩こう女川町
女川の思い出消えない絶対に

**ここに女川町民として（12.8%）**
大好きな仲間がみんなここにいる
戻ってく元の女川見届ける。
女川に物資をくれてありがとう
届けたい２の１の歌ふるさとに
やっぱ思う僕は女川大好きだ
だいすきだ今も昔も女川を
東京でガンバレ女川見つけたよ
和歌山で見た故郷への募金箱
今の自分女川と一つになれている
ありがとう私たちここで生きています
たくさんの人のおかげでここにいる

**未来への門出（14.0%）**
考がえる未来の町の予想図を
今ここで生きているだけで幸せだ
そろそろだ町も自分も変わらなきゃ
女川町あらたな町へプレイボール
キックオフ新たな町へとふみだそう。
前進だ私もあなたも女川も
「ここにいる」みんなで言いあい乗りこえる
これからの女川照らすその笑顔
女川に試練をくれてありがとう
被災地を言い訳にせず目指せ金賞！！
清水町家はないけど希望ある
雫から通して見えた未来の女川

**この先の未来を女川とともに（7.0%）**
女川に明るい未来待っている
がれきの町夢追いかけ走り出す
この町と一緒に成長していきたい
片づいた女川町に光さす
この町と私の未来を信じてる
女川の未来を変える私たち

注）当時の中学生が書いた句をそのまま転記している

る。ところが，町を襲った黒い波はすでに消退しており，目の前に広がっている春の海は青々と輝いている。【割り切れない海への想い】（5月）や【なぜこの海が】（11月）は，まだ怒りや喪失の哀しみを嘆き訴えるべき相手（黒い波）を必要とする中学生達と，すでに青さを取り戻している“海”との間に生じている隔たりとして理解される。

しかしこうした隔たりは，海の町で育ってきた中学生達が【それでもきれいな女川の海】（5月）を感じ，【海と共に再び】（5月）生きていくことを願う上で必要なものでもあっただろう。【海に言いたい】（11月）を構成している句のなかで彼らが対峙したり恨み言をもの申したりしている相手も，“津波（黒い波）”であり，“海”ではない。

地震によって地盤沈下が起こった女川では，震災前よりも海岸線が陸に迫って見えるようになった。視界を遮っていた建物のほぼ全てが流失・倒壊したことで，以前は海が見えなかったところでも広々とした海を見渡せるようになった。【今、青くきれいな海】（11月）に集まった句は，ただその光景の美しさを詠んだ句としてではなく，様々な心理的葛藤や消化しきれない複雑な心情がありながらも“海”を愛し，【豊かな海よもう一度】（11月）と願う海の子達の素直な言葉が紡がれた句として理解できるのではないだろうか。

“海”は津波に奪われた大切なものが還っていった場であり（【海へ還る】（5月）），中学生達はその大切なものに【海から見守られて】（11月）いくこととなった。津波に被災した中学生達の胸中にある心の葛藤に寄り添おうとするとき，海に暮らす人々にとって“海”がどれほど親しい愛すべき存在であるかを考慮する視点は不可欠と言えよう。

### 津波被災地の町民から　女川に暮らすひとりひとりへ

**町の描写と体験や心情の叙述**　〈海の句〉から生成されたグループのうち，【豹変した海の脅威】（5月），【黒い波に奪われた】（5月），【津波に言いたい】（11月）には，津波被害を直接的に表現している句が集まった。被災2ヶ月後の2グループに着目してみると，“女川”，“町”という語を含む句が過半数を占めていることがわかる（【豹変した海の脅威】で4句中3句，【黒い波に奪われた】で7句中4句）。こうした語を含まずとも，一部例外（「今はなきおばと歩いた浜の道」）を除き，多くの句が町の被災を詠んでいる。

これに対して，【津波に言いたい】（11月）に含まれている4句には，詠み手の個人的体験や心情が詠み込まれている。“女川”，“町”という語を含むものは1句もない。一定の条件で選出した少数の句を検討した結果から多くを述べることはできないが，被災体験について詠まれた2時点の〈海の句〉からは，被災2ヶ月後には町の被災や発災時の光景，被災8ヶ月後にはより個別的な被災体験や心情が詠まれやすいことが示唆される。

**象徴的希望と現実的希望**　こうした句に詠まれる体験内容の時期による質的相違は，〈女川の句〉にも認められる。被災2ヶ月後の〈女川の句〉は，その過半数が女川の取り戻しや希望の未来を掲げるスローガン調の句であった（【あの女川を取り戻す】，【大好きな我らが女川】）。被災2ヶ月後に1年生が詠んだ句を検討した黒沢・西野（2013a，2014a）が言うように，ライフラインの復旧がやっと進み始め，至るところに瓦礫が折り重なっていた当時に掲げられた“女川の復興”や“女川の未来”は，被災によって直面することになった数々の苦難を耐え抜きながら日々を過ごす上で不可欠な心理的拠り所，“象徴的希望（symbolic hope）”として理解されよう。

スローガン調の力強い句は，被災8ヶ月後の〈女川の句〉にもある（【不屈の女川】）。しかし，ごく少数にとどまっている。詠み込まれている“志”も，“希望”よりは“不屈の意志”に近しい。また，【あの日からの歩みと回復】（11月）を見ればわかるように，この時期に用いられている「復興」の語は，個々の体感や小さな気づきが伴う“「あの日」から「今」にかけての変化”として意味づけられている。被災8ヶ月に詠まれた1年生のある学級の句を質的に体系化して同学級の質的体系化結果（黒沢・西野，2013a）との違いを論考している黒沢・西野（2014b）は，被災8ヶ月後の句（例「みんなのね心の中に希望の芽」）では，「芽」（2句）や「木の種」（1句）が“希望”のメタファーとなっていることを指摘し，この時期の“希望”にはこれから伸びやかに育ち行く“成長・発展可能性”が含意されているのではないかと述べている。このような希

望を隠喩している句を本研究の素材のなかに見つけることはできないものの，「少しずつ町に光が灯りだす」のような句には，個々の体感や気づきから芽生えていった漸進的な“現実的希望（realistic hope）”の存在を見て取ることができる。

町全体が壊滅的被害を受けたとは言え，受け止めねばならない被害状況や喪失の質には高い個別性がある。また，第2回『俳句・連句作り』が実践された2011年11月は，避難所から仮設住宅の転居が次々と行われ，まもなく完了を迎える頃にあたる。目に見えた生活環境の改善によって安全感や町の回復感が現実的に増していくなか，凄惨な状況下で互いに励まし合う為に必要であった象徴的希望は次第に役割を終えていったのかもしれない。

### 追憶する過去の女川と掴み取る未来の女川

**憧憬としてのふるさと**　被災2ヶ月後に詠まれた〈女川の句〉からは，【変わり果てたふるさと】が生成された。津波が去った後に残された女川の惨状がどれ程に受け入れがたいものであったかは，「見たことない女川町を受けとめる」という句からもよくわかる。中学生達は【懐かしいあの町を】（5月）追憶し，【あの女川を取り戻す】（5月）のだと自他を鼓舞する。【大好きな我らが女川】（5月）を詠う句もある。

通常“ふるさと”という言葉には，生まれ育った土地を偲ぶ気持ちが付与される。詩歌ともなればなおさらで，平生の中学生がよく詠む言葉とは言えない。壊滅的被害を受けた町と同じように，彼らがその町で過ごしていた日常も忽然と姿を消してしまった。こうした重大な喪失を経験することになったからこそ，何気なく続いていた彼らの日々は昇華され，“ふるさと”という憧憬にまで高められたと考えられる。

先にも述べたように，憧憬としての“ふるさと”を追憶してその取り戻しを願うことは，重大な喪失を抱えながら非常事態下を生き抜くための象徴的希望と言える。ふるさとを取り戻そうとする意気込みを否定せずに認め励ますことが周囲には求められよう。しかしその一方で，たとえ句に「復興」の語を用いていたとしても，それは必ずしも現実的希望を意味しない。かつての女川を追憶するこれらの句を詠むとき，中学生達の眼差しは震災前の過去の何気ない日常に向けられている。努力では遂げられない「復興」を安易に支持し続けることは，彼らの喪の作業（mourning work）を妨げることにもつながりかねないだろう。

**今とこれからを過ごす町**　〈女川の句〉から生成されたグループに【新たな未来に向かう希望】（5月）がある。これに含まれている句は，いずれも未来に向かう展望が感じられる。被災からわずか2ヶ月後にあっても，中学生達は新たな未来の創造（想像）に向かう一面を持ち合わせていたことがうかがわれる。発災後はじめて訪れた春を詠む【春めき始めたみんなの女川】（5月）に含まれている句には，「海」，「空」，「笑顔」等，一種の普遍性を持つものを詠む大らかなものが多い。被災前の女川にあったものを様変わりした被災後の女川にも見つけることは，中学生達にひとときの安心をもたらすものであったのだろう。被災8ヶ月後の句にもこれと同種の句がある（【女川に息づく自然】（11月））。だが，同じように自然を詠んでいても，【移りゆく時節】（11月）には，普遍性を持つ自然ではなく時間とともに移り変わりゆく気候や景色が詠まれている。

また被災8ヶ月後には，【育ってきたふるさと】で【ここに女川町民として】生き，【未来への門出】に立とうとする自分達の姿が詠まれている。中学生達が追憶のなかにある憧憬としての女川ではなく，多くの喪失を経験した今の女川こそを自分達とともに生きている町と捉えていることが読み取られる。だからこそ中学生達は，女川を取り戻すのではなく，【この先の未来を女川とともに】（11月）「成長していきたい」と詠むのであろう。

被災から8ヶ月を経ても【なき女川への想い】（11月）が消えることはない。むしろ，驚愕や慟哭が詠まれている【流されていく女川】（5月）や【変わり果てたふるさと】（5月）よりもしみじみとした深い喪失の悲哀が感じられる。哀しみを詠う句と未来をまなざす句とが織りなすこうした重層的な情感をそのまま受け止めることこそ，未曾有の津波被害に見舞われた中学生達の一様でない心情に寄り添うこととなろ

う。その際，中学生達が詠む「町」が“今自分が過ごしている町”あるいは“未来の自分がともに過ごす町”であるのか，それとも“かつて過ごしていた追憶のなかの町”であるのかという時間的展望の方向性に注視することによって，彼らの心理状態やその変化をよりよく理解することができるかもしれない。

### 『俳句・連句作り』の利点と臨床的応用

“凍りついた記憶”（Herman，1992　中井訳　1997）とも呼ばれるように，外傷性記憶は言葉や前後関係を持たない生々しい感覚とイメージを持ち，漫然と時間の経過だけを待っても回復は期待できない。瞬間的記憶として刻みつけられた津波襲来や被災直後の凄惨な光景を五七五という安全な俳句の定型のなかに納めていけば，“凍りついた記憶”に言葉が与えられる。喪失の悲哀や哀悼を言葉にすることは，体験の意味の再構成（make meaning）につながる作業ともなる（Gillies & Neimeyer，2006；Storoebe & Schut，2001　富田・菊池監訳　2007）。『俳句・連句作り』は，津波被災による衝撃や喪失からの心理的回復に対して，一定の治療的機能を担う取り組みとなった可能性が考察される。

先行研究によれば，震災後表現活動における俳句の使用には，（a）定型の持つ安全性と保護性，（b）限られた字数で直截的に表現できる爽快さ，（c）日本の文化に親しい五七五のリズム性，（d）言葉を並べるだけで作品となる達成感の得やすさ，（e）“死”や“別離”を文字として残さず表現できる暗喩性等の利点がある（黒沢・西野，2013a，b，2014a，b；西野・黒沢，2013，2014b）。現地学校が主体となった学校プログラムとして実施されることで，（f）同様の被災を体験した者同士の共感体験の深化，（g）同じ体験への様々な意味づけを発見し合えることで発現する相互自助作用，（h）みんなで一緒に取り組む安心感とつながり感の促進，（I）廊下の掲示板や学校通信等で複数の作品が一挙に掲示された時にできあがる“集合体”としての圧巻さ，（J）学校全体や地域コミュニティを励ます波及効果等の肯定的作用も生じ得る（黒沢・西野，2013a，b，2014a，b，c；西野・黒沢，2014a，b）。

本研究では〈海の句〉と〈女川の句〉を取り上げたが，それによって，いずれの時期においても，“海”や“地元地域”に対して詠まれている思いは一様ではないことが明らかとなった。

『俳句・連句作り』では，詠んだ句が様々な形で現地の人々に共有されていくため，句を読む者にとっては，正に津波被災を象徴するような“海”や“地元地域”への思いさえも，人によって様々であることを知る機会となる。自他の作品を認め合うことを通して，自らのなかにも一様でない複雑な心情があることを認めていくことは，被災体験の語り直しにも通じる治療的プロセスとして意義深い。本研究から示唆される新たな『俳句・連句作り』の利点として，詠み手と読み手の双方に被災体験の語り直しを促し得る波及効果の高さを挙げることができるだろう。

### 研究上の課題

本研究の質的検討で素材としたのはＡ中学校生徒の句である。当該学校の生徒や地域の雰囲気等，句に影響を及ぼし得る要因を統制することは難しい。また，句の表現内容に影響を及ぼし得る現地の復興状況との照らし合わせが十分には行われていない点，中学生達が句を詠んだり読んだりした感想は検討されていない点，句から読み取られる心理的回復が生徒の実態を反映しているか否かが検証されていない点は研究上の課題と言える。

今後は，句が詠まれた背景を汲みながら特定の生徒が詠んだ俳句を時期ごとに追う事例研究や，『俳句・連句作り』の心理的効果や心理的回復を数量的に検証する質問紙調査研究を行っていく必要がある。より長期に渡る縦断的検討によって津波に被災した中学生達の心理的回復・成長過程に知見を得ることも意義深いと考えられる。

### 【引用文献】

Gillies, J., & Neimeyer, R. A.（2006）. Loss, Grief, and the Search for Significance: Toward a Model of Meaning Reconstruction in Bereavement. *Journal of Constructivist*

*Psychology,* **19**, 31–65.

Herman, J. L.（1992）. *TRAUMA AND RECOVERY*. New York: Harper Collins Publishers.（中井久夫（訳）（1999）. 心的外傷と回復　増補版. みすず書房）

方言を語り残そう会（編）（2012）. 負げねっちゃ――大震災五七五の句集――　新装版　銀の鈴社

星野恵則（1998）. 俳句療法の実際　山中康裕（監修）徳田良仁・飯森眞喜雄・大森健一・中井久夫（著）芸術療法――実践編――　岩崎学術出版社　pp.112–123.

飯森眞喜雄（1990）. 俳句療法の理論と実際　徳田良仁（監修）飯森眞喜雄・浅野欣也（編）俳句・連句療法　創元社　pp.128–205.

川喜田二郎（1967）. 発想法――創造性開発のために――　中央公論社

小林朋子・櫻田智子（2012）. 災害を体験した中学生の心理的変化――中越大震災１ヶ月後の作文の質的分析より――　教育心理学研究, **60**, 430–442.（Kobayashi, T., & Sakurada, T.（2012）. Qualitative Research on the Psychological State of Japanese Junior High School Students Who Had Experienced a Disaster, *The Japanese Journal of Educational Psychology*, **60**, 430–442.）

黒沢幸子・西野明樹（2013a）. 東日本大震災被災後約2ヶ月時点に実践された『俳句・連句作り』の学校プログラムに見られる中学生の心理的様相――KJ法による中1生の俳句作品の質的検討から――　目白大学心理学研究, **9**, 1–12.（Kurosawa, S., & Nishino, A.（2013a）. Psychological phases of junior high school students observed through haiku and linked verses composed in a school program 2 months after the Great East Japan Earthquake disaster. *Mejiro Journal of Psychology*, **9**, 1–12.）

黒沢幸子・西野明樹（2013b）. 東日本大震災津波被害区域内Ａ中学校での『俳句・連句作り』――グッドプラクティスとなった学校プログラムから学ぶ震災下の心のケア活動――　日本心理臨床学会第32回大会論文集, 122.

黒沢幸子・西野明樹（2014a）. 東日本大震災で津波に遭った2ヶ月後に女川Ａ中学校で実践された『俳句・連句作り』――各学年の俳句と1年後のふりかえりの質的検討――　コミュニティ心理学研究, **17**, 219–238.（Kurosawa, S., & Nishino, A.（2014a）. The “Haiku-Renku school program” that the junior high school “A” in Onagawa practiced for two months after the tsunami that followed the Great East Japan Earthquake: Student haikus and written impressions one year later. *Japanese Journal of Community Psychology*, **17**, 219-238.）

黒沢幸子・西野明樹（2014b）. 津波に遭った中学1年生が学校プログラムで詠んだ俳句の質的検討――被災8ヶ月後に行われた第2回『俳句・連句作り』から――　目白大学心理学研究, **10**, 39–53.（Kurosawa, S., & Nishino, A.（2014b）. Qualitative investigation of haikus composed by junior high school students suffering from a tsunami: The second “Haiku-Renku School Program” eight months after the disaster. *Mejiro Journal of Psychology*, **10**, 39–53.）

黒沢幸子・西野明樹（2014c）. 中学校間での連句交流による震災後心理的支援――津波被災約10ヶ月後に行われた『俳句・連句作り』――　日本心理臨床学会第33回大会論文集, 71.

まげねっちゃプロジェクト（編）（2012）. まげねっちゃ（負けないぞ）――つなみの被災地宮城県女川町の子どもたちが見つめたふるさとの１年――　青志社

西野明樹・黒沢幸子（2013）.『俳句・連句作り』に見られる被災地中学生の心理的様相とその変化――津波から約2・8・14ヶ月後に行われた学校プログラムから――　日本心理臨床学会第32回大会論文集, 121.

西野明樹・黒沢幸子（2014a）.『俳句・連句作り』の学校間交流を通した中学生による心の支援――津波に被災した中学生の五七五に七七をつなぐ――　日本コミュニティ心理学会第17回大会　大会プログラム・発表論文集, 48–49.

西野明樹・黒沢幸子（2014b）. 津波被災地域の中学校における3年間の『俳句・連句作り』――東日本大震災2ヶ月後から半年おきに詠まれた五七五から――　日本心理臨床学会第33回大会論文集, 72.

Storoebe, M., & Schut, H.（2001）. Meaning Making in the Dual Process Model of Coping with Bereavement. Neimeyer, R. A. (Ed.): *Meaning Reconstruction and the Experience of Loss*. American Psychological Association. pp.55–76.（富田拓郎・菊池安希子（監訳）（2007）. 喪失と悲嘆の心理療法――構成主義からみた意味の探求――　金剛出版）

高橋恵子・田松花梨・松本宏明・鮎川順之介・今泉

紀栄・三道なぎさ・柳生奈緒・栗田裕生・長谷川啓三・若島孔文（2012）．被災地において川柳が果たす役割とは――川柳がみつけた被災地の笑い――　笑い学研究，**19**，3–17.
冨永良喜（2012）．大災害と子どもの心――どう向き合い支えるか――　岩波書店

**【謝辞】**

東日本大震災に被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。本研究は，Ａ中学校の生徒・教職員方をはじめとした女川に住まう皆様から，貴重な作品等の一部をおかりして行われました。ここに記し，深い感謝と敬愛，そして哀悼の意を捧げます。本研究の素材となったすべての句は，（財）日本宇宙フォーラムによって，夜空に星として輝く国際宇宙ステーション「きぼう」に格納されました。中学生達の持つ豊かな力と可能性を引き出し得る取り組みを後援されている担当職員各位に敬意を表します。

本研究は，日本コミュニティ心理学会第16回大会にて筆者等が口頭発表した2題の研究成果を一部再分析してまとめたものです。また，研究費の一部は，JSPS科学研究費（課題番号24653199）および日本コミュニティ心理学会第1回「研究・実践プロジェクト助成」からいただいた助成金によって賄われました。

**【脚注】**

1　Ａ中学校で実施された『俳句・連句作り』で生徒が句をしたためた短冊を画像データ化して収めたDVDは，日本宇宙フォーラム（JSF）の「地球人の心ぷろじぇくと」によって，国際宇宙ステーション（ISS）にロケットで打ち上げられた。「地球人の心ぷろじぇくと」は，子ども達の詩・絵・写真等を収集・データ化して収録したDVDをISSに一定期間保管することで宇宙の平和利用を啓発する会員制社会教育活動で，東日本大震災発災以前の2011年2月から2013年9月まで展開されていた。女川の中学校と「地球人の心ぷろじぇくと」とのつながりについては，既出の文献（黒沢・西野，2013a，b，2014a，b，c；西野・黒沢，2013，2014a，b）を参照されたい。

―2014年9.24.受稿，2014年12.5.受理―

# Transformation in affection for the sea and hometown observed in haiku composed by junior high school students in the “Haiku-Renku School Program” after a tsunami

Sachiko Kurosawa Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Aki Nishino Mejiro University, Graduate School of Psychology

Mejiro Journal of Psychology, 2014 vol.11

**【Abstract】**

On March 11, 2011, the town of Onagawa, Miyagi prefecture, Japan, was struck by the Great East Japan Earthquake and Tsunami. Two months later, students at a junior high school in Onagawa started composing haiku, as part of a school program. In this study, we selected the haiku containing words that are synonymous with “sea” or “hometown” from the students' haiku composed in May and November 2011. The results of the qualitative investigation showed that the students confronted "tsunami," whereas they used “sea” as an icon of a beloved place where they could be revived together. In the haiku containing "hometown," psychological recovery process were observed. Although the students were missing the image of Onagawa as it used to be, they took steps toward the future after the event. Finally, we considered that the program encouraged both the haiku composers and readers to retell their tsunami disaster experiences.

**keywords :** psychological aid after an earthquake disaster, expressive activities, haiku, school program, recovery from trauma